
sanctuary in myself

天城 式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s a n c t u a r y i n m y s e l f

【Nコード】

N 0 3 7 8 K

【作者名】

天城 式

【あらすじ】

未来、それは想像もできない世界

(前書き)

恥ずかしい作品です

「ねえ、久住？」

……来た

「私、いったん未来に行くことになるから」

予想はしていたが、直接言われるとさすがに堪える

「でも、1、2週間で戻ってくると思う」

……へ？

「量産方法だけ教えて、上手く回り始めたら戻ってくるつもり」

「いいんですか？そんなんで」

「私の仕事はワクチンを開発することだから」

「でも……」

「とにかくアンタは心配しなくてもいいの」

「大丈夫、すぐ戻ってくるから。ちょっと待ってて」

俺は此処で心に決めていたことを言った

「恭子さん、俺も……未来へ連れてってください」

「……え？」

Sanctuary In Myself

「恭子さん、俺も……未来へ連れてってください」

そんな俺の言葉が、こんなことになるとは夢にも思わなかった

マルバスのワクチンが完成し、未来で複製方法を教えるだけのはずだったが

俺は、未来のこの姿を見て逃げ出してしまった

瘦せ果てた大地、壊れた建物、そしてウイルス患者・・・これを見ていると、怖くてたまらなかった
虚ろだが前に『夢』で視はしたが、実際に見て100年後の地球だ
と思うと

とてもじゃないがまともではいられなかった

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

俺はどこまでも走り続けた

どこまでも、体力が無くなろうと走り続けた

どこかに・・・この世界にも『生きている』場所が在るかもしれない・・・と

一体何時間走っただろうか

しかし、時間なんてものは関係なかった

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

ガツ スザア

「あぐっ・・・」

膝に痛みが走り、血が滲み出してくる

だが、そんなものには眼もくれず、一心不乱に走り続けた

走っていたら、ある場所に着いた

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・こ、此处は？」

何か、ひどく懐かしい感じがして足を止める

「何だ？・・・此处は・・・」

何故か此处に来た事があるような感じがした

「何だろっ・・・懐かしい気がする・・・」

でも見覚えは無かった

「あぐっ・・・」

酷く頭痛がした

これほど痛い頭痛は祐介のときと同じ・・・いや、あの時以上だ

「ああ・・・ぐああああああ・・・」

何故だ、何故こんなにも頭が痛くなる

祐介のときのように、何か負担でもあるのか？

でも今この近くに祐介は居ない

「じゃあ何故・・・こんなにも頭痛がする・・・」

考えた。何故こうまで頭が痛いのかを

思いつく限りに考えた

そして、一つのことに行き着いた

それは・・・五年以上前のこと

俺の・・・無くなった記憶

「でも・・・此処が俺の記憶と関係あるのか？」

ズキッ

「ああ・・・ぐああ・・・！」

やはり記憶に関することが原因か・・・

しかし、何故未来のこの場所で俺の記憶が？

それに何だか懐かしい・・・いや、安心感がする

安心感？何故？五年前・・・一体俺は何をしたんだ？

判らない・・・思い出せ！！五年前、何があつたかを！

頭痛ぐらい我慢しろ！！

痛みを耐えろ！！この記憶にはそれだけの『意味』があるはずだ！！

ズキッ

「ぐううう・・・」

ん？今・・・少しだが・・・何か思い出した気がする

あれは・・・保奈美か？

いや・・・今より遥かに小さい。と言うことは、五年前のか？

ズキイ

「ああ・・・ぐああああ・・・」

頭をカナヅチで殴ったような痛みが走る

「なるほど・・・少しでも記憶が戻りそうになると・・・頭が痛み

出すか・・・」

それでも！！どれほどの痛みがあろうとも俺は記憶を戻したい！！

それが・・・俺に出来る唯一の事だと思うから・・・

・・・あれは、神社の裏手か？

ズキッ

確かあの時・・・保奈美と俺と・・・俺の両親でハイキングを
していたんだっとな・・・

確か・・・5月5日か・・・

ズキッ

そうだ・・・あの時・・・保奈美と遊んで・・・

保奈美はあまり楽しそうじゃなかったっけ・・・

それで・・・昼になって・・・飯を食うことになって・・・

ズキッ

あまりにも保奈美がのろのろしてたから・・・呼んでたっけ・・・

そうしたら・・・音が消えて・・・両親と俺の周りを光の格子が

走って・・・

ズキッ

「ぐう・・・」

それから・・・保奈美が・・・走ってこっちに来たんだっか・・・

それで・・・光の格子が・・・光りの柱に変わって・・・

俺たちの背中に・・・羽根が生えた・・・

ズキッ

そして・・・羽根は・・・ゆつくりと・・・大きく羽ばたいた・・・

・

俺たちの体が浮き上がる

保奈美が手を伸ばしてきた・・・

そして・・・保奈美の手が・・・俺に届いた・・・

ズキッ

けど・・・

俺は・・・

保奈美を・・・

ズキッ

「ぐあああああ・・・」

そうか・・・そうだったな・・・俺は・・・保奈美を助けたんだ・・・

・
思い出した

すべて思い出した

これで、俺は・・・

俺は、記憶を戻した

これで・・・俺は、何も・・・

・・・何も？

俺はこんなところで何をしている？

俺は此処に何をしにきた？

記憶を戻すため？

違う！！

此処にはウイルスを治す為に来たはずだ

そうだ・・・マルバスの治療に来たはずだ

「このままじゃ恭子さんに迷惑だな・・・。後で謝るか・・・」

帰るか・・・俺の『居場所』に・・・そして、此処の皆を助けるために

「でも・・・此処って・・・あそこからどれだけ離れてるんだろ・・・

・（汗）

わき目も振らずに走ってたから此処が何処だかなんて分からなかった

「誰か居ないもんかね・・・」

まあ・・・とりあえず北に向って走ってたはずだから

「南に向ってみるか・・・」

まあ・・・のんびり歩いていこう

「えーと・・・確か・・・此処についたのが・・・10時だったよ

な・・・で、今の時間は？」

携帯を確認する

「・・・・・・はあ！？14時！？」

俺・・・約4時間も走ってたのか・・・良く体力持ったな

「ってことはなんだ？歩いて帰ると向こうに着くのは大体20時？」

「はぁ・・・悲しくなってきた・・・」

まあいい・・・行くか

「それにしても・・・来たときはあんなにも怖かったのに今は清々しいな・・・」

今は、とても気が楽だった

そしてのんびりと歩いている

「今何時だろう・・・」

まだ30分しか経ってない

「全然時間たつてね・・・携帯も圏外だし・・・はぁ・・・」

かつたるいと思いつつも今居るべき場所に帰るために歩き始めた

.....

.....

.....

.....

「はぁ・・・疲れた・・・今何時だ？」

携帯確認。現在時刻18時。

「大体半分くらいか・・・」

長い道のりを歩いてきて何とか見慣れた・・・もとい、通ってきた覚えのある場所に着いた

「はぁ・・・よくよく考えたら俺、相当走ってたんだな・・・」

深く溜め息をつく

道理で喉がカラカラなわけだ

「あゝ、水が欲しい！」

自販機あるかな？とあたりを見回すが何も無い

「何故に!？」

何故街中なのに自販機無いんだ？

「神よ!!これも貴方が与え給うた試練なのですか!!」

何て言っていないで何か飲み物・・・

水道も無いのか此処は!!

「はぁ・・・恭子さんのコーヒーが飲みたいなあ」

後ろからスツと缶コーヒーを渡された

「おお！有難う、って誰が？」

後ろを振り向くと

ドクン

「あ・・・恭子・・・さん・・・」

「あんたは今まで何やってたの・・・」

「すいません・・・」

「いきなり居なくなつて・・・ホントに心配したんだから」

俺に寄りかかる恭子さん

「本当にすいませんでした」

「まったく・・・ホントに迷惑ばっかかけるんだから」

言葉とは裏腹に嬉しそうな声

「もう何処にもいきませんよ」

俺はそつと抱きしめる

「うん・・・」

.....

.....

俺たちは10分くらい抱きしめあつてから帰ることにした

「そつえば、どうやって此処に？」

「車に決まつてるじゃない」

なるほど・・・

「それじゃ、帰りましょうか」

「そうね、それじゃ乗つて」

「はい」

.....

「でも何で俺を迎えに来たんですか？」

俺は車の中で恭子さんに質問した

「そりゃ心配だったからに決まつてるじゃない」

「すいません・・・」

「もういいわよ」

俺は心の中でも謝り続けた

「そういえば・・・ワクチンは・・・？」

「心配しなくても大丈夫よ。ちゃんと終わらせてから来たから」

「そうですか。これでこの世界も救われますね」

俺は心の底から喜んだ

「・・・」

「どうしました？」

「久住・・・あんた、何かあった？」

「え？どうしてですか？」

確かにあったのはあったが・・・

「・・・何か吹っ切れた・・・いや、何かを取り戻したというか何
というか・・・」

鋭い

「確かにありましたよ」

「え？何があったの？」

興味津々といった感じで聞いてくる

「秘密です」

「教えなさいよ！心配させたんだから聞く権利ぐらいあるはずよ！
それを言うか・・・まあ仕方が無いからいいけど・・・

「そうですね・・・まあ取り戻したといいましょうか・・・」

「何を？」

「それもですか？」

「モチロンじゃない」

本当に仕方が無いなあ

「記憶です」

「・・・え？」

「だから記憶です」

「・・・記・・・憶？」

「そうです。記憶です。ほら俺って5年前から記憶なくしてたでしょ？それが戻ったんですよ」

俺はそれまでの記憶をなくしていたこと

無くしたときに何があったのかを

それを詳しく恭子さんに説明した

「でも何で記憶が戻ったのかしらね」

「まあ・・・ここは『奇跡』って事にしておきませんか？」

「それもそうね」

それから俺たちは笑いあった

.....

「それじゃ、後は帰るだけですか？」

「そうね、教えられることは教えたから上手く回りさえすれば帰れるわよ」

「ってことはあと少しってことですね」

「そうなるわね」

あと少しで帰れるのか

何か・・・寂しいものだなあ

ほんの少ししか居なかったのに名残惜しいな・・・

「久住？どうしたの？」

「いや・・・なんでもないですよ」

それもそうか・・・何せ・・・記憶を取り戻したところだしな

「すいません・・・少し寝かせてもらえますか？」

「いいわよ・・・ゆつくりおやすみ・・・」

ゆつくりと瞼を閉じる

「ずいぶん疲れてるようね・・・」

そんな声を聞きながら眠りに落ちていった・・・

.....

「ん・・・よく寝た・・・」

「おはよう久住」

「おはようございます恭子さん」

「よく寝たわね・・・後は帰るだけよ」

「・・・そんなに寝てたんですか？」

時計を見るともう昼だった

「疲れてたようだし仕方ないわよ」

「はい・・・」

「それじゃあ・・・帰りましょうか」

「そうですね」

俺はこの世界に別れを告げ自らが居るべき世界へと帰っていった
俺の大切な人と一緒に・・・

そこが・・・俺にとって、『聖域』といえる場所だから・・・

俺たちは歩いていく・・・自らの『聖域』へと・・・

大切な人と共に歩いていく・・・

それが・・・俺の『聖域』だから・・・

皆は誰しも心に『聖域』を持っている・・・

一人一人の『聖域』は違いとも

抱いているものは同じ・・・

皆も歩いている・・・

自らの『聖域』へと向って・・・

(後書き)

恥ずかしすぎる...

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0378k/>

sanctuary in myself

2011年10月6日19時04分発行